

◇平和なら成長いらぬー農民作家・山下惣一さん(76)

空へ、空へと軽トラックはうねうねとした小道を上っていく。眼下にはきらきら光る玄界灘。「子ども時代は牛を連れて上がった道です」と運転席の山下惣一さんが話す。ここは佐賀県唐津市湊地区。何十枚もの土の段々が窓外に広がる。

「うちの集落では8割が棚田です。こんなこぢんまりした耕作地で国際競争力をつけなさいと言われても『できるものならあなたがやってください』と返すしかない。カヤが茂り放題の場所は耕作放棄された田であることを示す。

到着した山下さんの梅畑は白い花が満開だった。花びらに指をやりながら、つぶやいた。「安倍政権が生まれてから、世の中の空気が震災前に戻ったように感じるんですよ」

自らを「百姓」と呼び、70アールの水田と50アールのミカン畑を丹精する。農家の長男に生まれ、農を営みながら小説やルポルタージュ、エッセーを執筆。戦後の時代の中で、揺れ動く農業と村の姿を見つめてきた。

2年前の3月、山下さんは唐津駅に車を走らせた。改札から出てきたのは東京に住む中学2年と小学5年の孫娘。2人の母である山下さんの娘が放射能の影響を心配して避難させたのだ。「リュックを背負い、両手に大きな荷物を持った姿に『学童疎開』を思い出しました」。複雑な気持ちになった。「家は九州電力玄海原発の10キロ圏付近。疎開先は東京より原発に近い。54基もの原発がある日本に本当の逃げ場はないのだと思い当たりました」

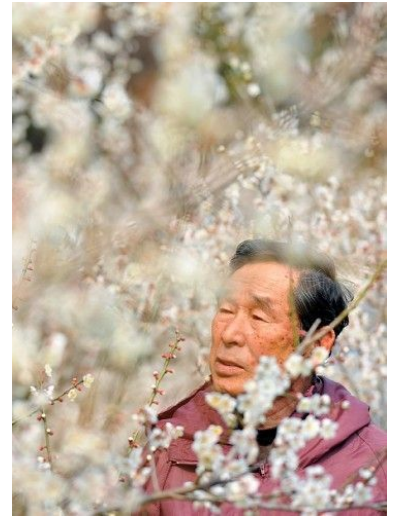
福島第1の事故前から原発には反対だったが、周囲が安全と信じ切る中、声に出すのをはばかった。事故後は玄海原発の運転差し止め訴訟原告団に加わった。「原発は人間の生存基盤を脅かしながら経済成長に貢献してきた。おかげで豊かになったが、時限爆弾の上で宴会をしているようなものだった。3月11日の直後には多くの人がそれに気づいたはずですよ」

原発が助けてきた「経済成長」は20年に及ぶ低迷期を経て、安倍政権最大の目標に振り返いた。だが山下さんは言う。「経済成長と聞くとギクッとします。農業は劣等生ですから」

確かにその歴史は成長と拡大の一途をたどった工業とは著しい対照をなしている。1961年に制定された農業基本法(99年に廃止)に基づき、農業でも生産性や所得アップのため経営の規模拡大が図られたが、他の産業との格差は縮まらなかった。多くの生産者が金になる別の仕事に乗り換える一方、土にこだわり続ける農家があった。

「農業の基盤になる自然界は進歩も発展もなく、永遠の循環を繰り返しています。気候変動に悩む農家は去年と同じように今年の収穫が、今年と同じように来年の収穫があるのが一番ありがたいんです。こうした状態は私たちには『安定』だが、経済社会では『停滞』とみなされてしまう」

「劣等生」は今、最大の試練にさらされている。環太平洋パートナーシップ協定(TPP)への参加問題だ。「**農業就業人口は250万人で就業者全体の4%に過ぎない。国内総生産に占める比率はわずか1%程度です。しかし、この4%の人がカロリーベースで4割という日本の食料自給率を支えているのです**」。農水省の試算によると、関税を撤廃すると自給率



山下惣一さん＝徳野仁子撮影

は13%に下がる。「安い輸入米を食べる日本人が増え、国産の米は高級品として輸出されるようになります。日本に農業が必要とされるのは日本人自身が食べる米を作っているからで、輸出のためだけの農業なら意欲を保てるでしょうか」

成長の観点からは劣等生かもしれない。だが、農には農だけのかけがえのない価値、豊かさがある。**里山や水田、春の小川……日本人の原風景とされる世界は農業によって培われたものだ。「日本の自然を守ってきたのは農なんです」**

だからこそ**TPPを「原発と並ぶ破局への両輪」と危惧する**のだ。「急激な成長はどこか、もろさをはらむ。ウバメガシのように成長が遅い木は硬く長持ちするが、モヤシのようにすぐ成長するものは腐敗も早い」

かつて農村の住民は、都会の豊かさに追いつこうと出稼ぎをした。仕事がなくなると原発を受け入れた。だが今、農村は豊かか。ここに山下さんの発想転換の起点がある。「私の豊かさのイメージを映像にすればこうなります」。ポカポカ陽気の中、妻は大根の皮をむいて漬物をつくっている。自分はミカンを袋詰めをしている。桃の花が咲き、鶏が遊び、犬は寝そべっている—そんな日なたの匂いのする景色だ。「**平和に不安なく暮らせれば成長なんかなくていい。それでいいんじゃないんですか、人生は**」

農業をして60年。「それでも米の収穫は60回しか経験していない。全く飽きない」と笑った。「春、田んぼに水を張り土くれを砕く代（しろ）かきの作業をしていると、生き返るような感じがするんです。ミカンの木を剪定（せんてい）するのも面白い。**生き物を育てるのは楽しい。人と競争せず、ノルマもない。百姓暮らしには金に換えられない自由さがあります**」

そんな山下さんの農に共感する若い世代から、しばしばアドバイスを求められる。佐賀県内で出会った陶芸家を目指す夫婦は、子ども2人がいて陶芸の収入だけでは生活できず「自給自足をしたい。どの程度の規模で農業をすればいいか」と尋ねた。「**米は畑でも育つ陸稲を植えばいいよ**」と教えると喜んだ。

「**自給自足すれば3度の食事が家ででき、自らの生活を手中に収めている充実感が得られます。そこまでいなくていい、年金プラス農業でも、週末農業でも構わない。百姓に戻る時間を作ることが豊かさにつながるんです。国も、もっと国民に農地を提供する施策を考えるべきです**」

60歳で「頑張る」のをやめたという。農閑期の今は午前7時前に起床。それから50分、妻と気功をして、畑に出るのは8時半。11時半に帰宅し、約2時間昼休み。夕方5時には引き揚げて風呂に入るのが日課だ。

時折、夜9時を過ぎて訪れる宅配便の職員の疲労を案じる。「いつからそれが当たり前になったのか。我々には、深夜まで働く人の生活への想像力が欠けているのではないか。豊かな生活の核心は『ゆとり』です。今年是对前年比何%増の利益を目指すといった数値目標は、その対極にある。実現のために自分を忙しくするんだから」

「なぜ経済を成長させなければならないのか。頑張る人たちの手取りを増やすために他ならない」。安倍晋三首相は国会でそう強調した。泥の付いたジャンパー姿の農民作家が少しだけ語気を強めた。「戦後68年、私たちはその道をひた走ってきた。結果が今の現実じゃないですか」

4月1日、今年のコシヒカリの種をまく。【宮田哲】

■人物略歴

◇やました・そういち

1936年、佐賀県生まれ。67年県文学賞受賞を機に執筆活動に。共同代表を務める「アジア農民交流センター（AF

EC)」は06年毎日国際交流賞を受賞。共著の「市民皆農」が原作の舞台「田畑家の行方」が4月25日より東京・新宿の紀伊国屋サザンシアターで公演。



世はアベノミクス一色。3・11も、かつての金もうけ主義への反省も、忘れ去ろうとしているかのようだ。「真の豊かさ」とは何なのだろうか。5人の識者に聞いた。